



THE DAILY NEWS

KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS

Mon 20 May

DAY 4

Japanese

Yesterday's Highlight

雨の中、熱戦は続く

競技3日目となる5月19日は、朝9時の競技開始時間から冷たい雨に見舞われ、夜7時すぎの最終種目まで断続的に続いた。にもかかわらず、日曜日ということもあり朝から大勢の観客が来場、選手たちを温かい拍手や声援を送った。T20女子砲丸投げで世界新記録が誕生するなど、この日も好記録に沸いた。

■ T12女子走り幅跳び



視覚障がいクラスT12女子の走り幅跳びが行われ、ウズベキスタンのヨクトホン・ホルベコワが、試技3回目にマークした5m48の記録で金メダルを獲得した。

今大会には、東京パラリンピックで銀メダルを獲得したスペインのサラ・マルティネスのほか、昨年のパリ大会で銀メダルを獲得したホルベコワ、銅メダルを獲得した日本の澤田優蘭ら6名が出場した。

マルティネスが試技1回目で5m16をマーク、その後ホルベコワが5m39で上回り、5m超えの跳躍が勝負のカギとなった。優勝したホルベコワは、6回の試技全てが5m台の安定したパフォーマンスを披露。前半3回目の5m48の記録で金メダルを獲得した。競技終了後にコメントを求めると、「英語は苦手」と言いながらも、「私にとっては、世界選手権での初めての金メダル。とても嬉しいです。サンキュー、神戸。“アリガトウ”ジャパン！」と、英語、日本語を織り交せて喜びを語ってくれた。

昨年のパリ大会に続き、2大会連続銅メダルを獲得した澤田は、試技3回目で4m92をマークし、ホルベコワ、マルティネスに続く3番手で後半を迎えた。澤田の自己ベストは2018年の北京グランプリで出した5m70。今大会出場した選手の自己ベストだけで比較すれば、澤田の記録はトップである。今大会、澤田の目標の一つも、5mを超えるジャンプで勝負することだった。前半は着実に記録を残すことに注力し、後半には攻めのジャンプに切り替えた。

「5本目の跳躍は踏み切りが手前になりすぎて好記録にはつながらなかったのですが、飛距離は一番出ていたと思いますし、精度を上げれば記録につながるという感触がありました」

最終6回目の試技で、5m00。目標としていた5m50には及ばなかったが、好感触を得て会心の笑顔で競技を終えた。

■ T36男子400m

脳原性まひのクラス、T36男子400m決勝には19日に行われた予選を勝ち上がった8選手が出場した。前回パリ大会金メダルのジェームス・ターナー（オーストラリア）が先頭でホームストレートに入ったが、フィニッシュ直前でバランスを崩し、すぐ後ろにいたウィリアム・ステッドマン（ニュージーランド）が交わり、53秒36で優勝した。ターナーが0秒16差の2位、日本の松本武尊は56秒42で、4位に入った。



ステッドマンは、「勝てるとは思っていなかったのも、まだ信じられない。いいレースができて本当に嬉しい」と笑顔で輝かせた。2番手で前を追う展開だったが、「最後までリラックスして追い続けることだけを考えていた。実はラスト10mで脚を使い切ってしまったので、どうなるか分からなかったが、とにかくフィニッシュラインを越えるまで脚を動かして続けようと思ったんだ」と、接戦となったレースを振り返った。

パリパラリンピックでも対戦が予想されるが、「また一緒に走れることが楽しみ。ジミー（ターナー）は素晴らしい選手だから、何が起こるか分からないけどね」。

敗れたターナーは、「2位は悔しい。ずっとハードなトレーニングを積んできたし、もっと速く走れると思うから。でも、今日は成果が出せなかった。脳原性まひのため、走ると体が硬くなりやすく、最後は身体のコントロールがきかなかった」と悔しさをにじませた。それでも王者は、「パリパラリンピックを楽しみにしている。そこが、僕が本当に輝ける場所になるはずだから」と、パラリンピック連覇を目指し、巻き返しを誓った。

松本は前回パリ大会も同じ4位だったが、「去年はゴール前ですごいスピードで抜かれ、全く手が届かなかった。でも、今回は自分が（3位の選手を）抜かせる距離にいた」と自身の進化を口にし、「パリパラリンピックではメダルを狙って行きたい」と話した。

■ T54女子800m

車いすT54女子800m予選がモーニングセッションに、決勝がイブニングセッションに行われ、ドイツのメルレ・メニエが1分58秒47で優勝した。

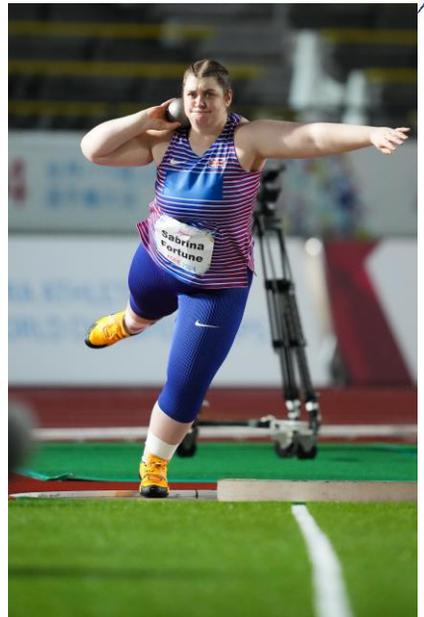
17時56分にスタートした決勝で、直後に飛び出したのがメニエだった。オープンレーンでのポジション争いは中長距離レースの重要なポイントだが、イン側から先頭をキープ。2番手に中国のティエン・ヤジュアン、3番手には日本の村岡桃佳がびたりと続いた。雨の中、スローペースで周回し、最後のコーナーを曲がって直線に入るところで激しいラスト



スパートの戦いになった。この時点で2番手につけていた村岡のすぐ外側に中国の選手2名が並走、村岡とともに逆転優勝を狙うがメニエがわずかに逃げ切った。村岡まで4名が1分58秒台に入る僅差だった。

「優勝できるなんて、アメージング！ どう言葉にしていいいか、わからない。ただただ、信じられない」と、メニエは喜びを口にした。現在19歳。昨年のパリ大会にも出場しているが、その時には5位だった。「スタートが得意ではないので、とにかくスタートに集中した。先頭で走ることは想定していなかったが、気持ちを強く持って前に出たら、成功しました」。

1分58秒88、3位の選手とはわずか0.03秒差でゴールした村岡は、「悔しい気持ちもあるが、以前の自分であれば、このような激しい競り合いで大きく遅れをとってしまうことが多かったので、デッドヒートの集団にいられたことは成長した証でもある。成長した自分と、足りないところを痛感したレースでした」と、語った。雨の中のレース、ラストパートで競技用車いすのハンドリムが滑り、思うように加速できないもどかしさに苦しめられたという。「決勝で4位以内は最低限の目標だったけれども、今日の決勝のメンバーであれば表彰台が狙えるかもしれないと思っていたので、やっぱり悔しいです」。



■ T20女子砲丸投げ

また一つ、世界記録が誕生した。知的障がいのクラスT20女子砲丸投げで、イギリスのサブリーナ・フォーチュンが6投目で14m73をマークし、ポレスイスマル・メンデスサンチェスが樹立した14m39の世界記録を塗り替えた。メンデスサンチェスは試技3回目に出した13m90で2位となった。

世界選手権に初出場した日本の堀玲那は、12m26のアジア記録で7位に。「世界記録とアジア記録では、差がすごく大きい。世界との差を痛感したけれども、この経験は、きっと自分の成長につながっていくはず。次は、アジア記録を13m、14mと伸ばして、アジア人が世界記録を更新できるように、しっかりと進んでいきたい」と、涙ながらに語ってくれた。

■ T63 男子走り幅跳び

大腿義足を片脚（T63）、または両脚（T61）に装着して競うクラスが混合で競うT63男子の走り幅跳びは、T63の世界記録保持者のドイツ、レオン・シェファーが最終試技で7m22をマークし、金メダルを獲得した。2019年のドバイ、昨年のパリ大会に続き、大会3連覇を達成した。

前回パリ大会銅メダルのヨエル・デヨング（オランダ）など12人が出場。日本からも第一人者の山本篤ほか、稲垣克明、近藤元の3名がエントリーした。

第1試技ではデヨングが6m82でトップに立ったが、2回目でシェファーが6m84で逆転。3回目にも7m03まで伸ばし、ライバルたちにプレッシャーをかけた。3回の試技を終えて上位8人のみが進んだ4回目にデヨングが7m02、6回目の最終試技で7m04でシェファーを上回ってトップに立った。直後に跳んだシェファーが7m22でトップを奪い返し、優勝した。

シェファーは、「3連覇できて興奮しているし、ホッとしている。ヨエルのおかげで面白い試合になって楽しかった」と満面の笑顔で喜んだ。最終試技前にデヨングにリードされたが、「僕はプレッシャーも大好き。だから、跳ぶ前に持っている力を発揮す

るんだと自分に言い聞かせた。とにかく今季、重点的に練習してきたスピードを出して助走することだけを心がけたら、最後にいいジャンプができたんだ。パリパラリンピックでも連覇したい」と力を込めた。

日本の3選手は山本が3回目に今季ベストの6m48を跳んで一時は3位につけたが、その後、記録を伸ばせず5位。近藤は自己新となる6m18をマークして7位入賞。稲垣は2回目に5m63を記録したが9位で、4回目以降に進めなかった。

ケガの影響で調整が遅れていた山本は、「3回目は流れのいいジャンプができたが、後半は力が入りすぎたかもしれない。今の跳躍のなかではギリギリの記録が出せた」。自身5回目となるパリパラリンピック出場は国内での次戦で、挑む。



GO KOBE 2024!

日本中の1万人スマイルが神戸2024世界パラ陸上に集結！ スマレゾキャンペーン

スマイルレゾナンスキャンペーン、略して「スマレゾ」。「スマイル（笑顔）」と、共感・共鳴・より深い理解を生み出すという意味の「レゾナンス」を掛け合わせたキャンペーンの愛称だ。一人ひとりの想いや個性、笑顔をつなぎ合わせ、選手を応援しようというキャンペーンである。神戸2024パラ陸上のラッピングを施したキャラバンカーが、全国にある先導的共生社会ホストタウン15都市を巡回。パラアスリートとの交流イベントや学校訪問に参加した人々の笑顔の写真撮影会が行われた。



先導的共生社会ホストタウンは、東京2020パラリンピック開催に伴い、共生社会の実現に向けた取り組みを推進すると国が認定した15都市（青森県三沢市、岩手県遠野市、秋田県大館市、福島県福島市、東京都世田谷区、東京都江戸川区、神奈川県川崎市、静岡県浜松市、三重県伊勢市、兵庫県神戸市、兵庫県明石市、山口県宇部市、福岡県飯塚市、福岡県田川市、大分県大分市）のこと。スマレゾキャンペーンは、東京2020パラリンピックの陸上競技会場だった国立競技場を皮切りに、東北エリア、九州・中国エリア、首都圏エリア、中部・近畿エリアの学校やパラスポーツイベント会場を回り、さらに協賛スポンサー企業を訪問して最後に神戸市内の100日前セレモニー会場、特別支援学校でも応援撮影会を実施した。全国のスマレゾキャンペーンに賛同して集まってくれた6,778人のほか、直接会場に行けない人のために行われたオンラインによるスマレゾキャンペーン撮影会でも、4,666人もの人々が集まった。全国1万人を超える大きな笑顔の輪が、スマレゾキャンペーンで実現したことになる。

応援フォトを撮影したのは、主に視覚に障がいのあるカメラマン。応援写真に写る人たちの表情ではなく、「がんばれ～」のかけ声でシャッターを切る。元気な声で「がんばれ～」と叫んでくれた子どもたち、はにかみながらも力強いガッツポーズでフレームに収まってくれた人々などから「パラアスリートがより身近に感じられるようになった」と、キャンペーンを通じて共感の声が寄せられている。





笑顔の応援フォトは、大会会場であるユニバー記念競技場のほりなど、さまざまな装飾にビジュアル活用し、大会に出場する各国選手のほか、応援にきた観客の目を楽しませてくれている。会場に足を運んだら、ぜひ、応援写真にも注目してほしい。もしかしたら、知っている誰かの笑顔に出会うかもしれない。写真に写る笑顔の人々と一緒に、選手を応援しよう。

Competition Schedule and Results

